

【翻訳】 1642年1月、デカルトからレギウスに宛てられた書簡

持田辰郎

ここに訳出されたものは、1642年1月、デカルトからレギウスに宛てられた書簡⁽¹⁾であり、公開のものを別とすればデカルトの書簡のうち最も長いものの一つである。新旧両哲学間のいわゆる「ユトレヒトの争い」における一つの結節点に位置する文献であり、管見では本邦初訳である。

この書簡の宛先、レギウス (Regius: 1598-1679)、本名アンリ・ル・ロワ (Henri le Roy) はユトレヒト大学の医学、植物学教授。1646年の『自然学の基礎 (Fundamenta Physices)』出版以降、デカルトと袂を分かち、デカルトをしてその裏切りと剽窃を公言させ⁽²⁾、また『揭示文書への覚書』を書かせることとなった揭示文書の主でもある⁽³⁾。だが、本書簡の時点ではまだデカルトの忠実な弟子であった。バイエによれば、彼は、ユトレヒト大学教授でデカルトの友人でもあるルネリ (Reneri: 1593-1639) からデカルト哲学の手ほどきを受け、それを生理学に应用することによって評判を獲得し、1638年に教授職を得た。彼は同年8月18日付けの初めての書簡で、デカルトに感謝とともにその経緯を伝え、デカルトの弟子となった⁽⁴⁾。ルネリ死後はユトレヒトにおけるデカルト派の中心人物である。デカルトもレギウスを高く評価し、当時は「レギウスのきわめて明晰で透徹した精神を信頼していて、彼の書いたもののうちに私のものと喜んで認めないものはほとんどないと思う」と公言している⁽⁵⁾。むろん忠実な弟子と言っても盲目的に従っているわけではなく、独立した研究者としての矜持は保っており、とりわけ戦術的な助言についてはデカルトの意にそぐわぬことも多々見られる。デカルトが本書簡で危惧するところである。しかし、事あるごとにデカルトに伝え、あるいは自分の文書を師たるデカルトに吟味してもらうことは怠っておらず、本書簡はそのようなやりとりの一部である。

さて、問題の舞台はユトレヒト大学である。ユトレヒトの実力者たちの中には、本書簡にもその名が登場するファンデル・ホルク、エミリウス等々、デカルトの友人も多く、またルネリの存在もあいまって、1636年創立のユトレヒト大学は「生まれながらのデカルト派」という趣を呈していたという⁽⁶⁾。しかしながら旧哲学を保持せんとする敵も多く、1639年のルネリ死後は新旧両派の闘争の場となる。敵陣の主役は神学の教授陣の長、カルバン派の牧師ヴォエティウス (Voetius: 1589-1676) であり、彼は1641年3月16日、大学の総長となった。いったんはレギウスに対する態度を和ませたものの、レギウスが同年4月17日、5月5日と続けてテーゼを発表するに及んで、彼は本気でデカルト主義と対決する決心をする⁽⁷⁾。12月8日にはレギウスのテーゼの討論会がおこなわれたが、本書簡第4段落に述べられているように、ヴォエティウス派の学生たちの妨害により混乱に終始する。同月18日、23日、24日には対抗するヴォエティウス側のテー

ぜの討論会が実施されるが、レギウス派の学生たちとの対決の場と化してしまう⁽⁸⁾。

このヴォエティウスのテーゼに対しどのように対処すべきか、レギウスはデカルトに問い合わせ、それによって本書簡が書かれることとなった。バイエによれば、

レギウスは、……ヴォエティウスのテーゼに書面で回答する決心をした。彼は翌年1月24日にデカルトに手紙を書き、それまでに起きたことのすべてを伝え、今後についての意見を求めた。彼はデカルトに、人びとの気持ちがどれほど彼に厳しくなっているか、ヴォエティウスの党派がどれほど日々強くなっているかを強調した。そして彼の保護者である行政官ファンデル・ホルク氏は、彼が沈黙を保つか、あるいは、ヴォエティウスや他の教授たちを扱う際には可能な限りの穏和さと敬意をこめて覆い隠すようにという意見であったことを付け加えた。彼は同時に、ヴォエティウスのテーゼに対して準備した答弁を送ったが、それは、彼の他の著作に対するのと同じ「師としての」権利でデカルトがそれを吟味するためであった⁽⁹⁾。

しかし、レギウスの準備した文書は本書簡第2段落にあるとおりの代物であって、デカルトはそれを見限り、かわりに自身がレギウスになりかわって答弁文書の草稿を書いてやることとなる。第3段落から第22段落まで、すなわち本書簡の根幹部分がそれである。

さて、ヴォエティウスが批判するレギウスの主張は、テーゼに附された系⁽¹⁰⁾において以下の3点にまとめられている。

1. 人間は偶有的存在であること。
2. 地動説。
3. 「実在的形相」ないし「実在的性質」の否認。

本書簡の論題も当然この3点であるが、地動説については第15段落で触れられているだけであり、焦点は他の2点であろう。「人間は偶有的存在である」というレギウスの主張の、とりわけその表現の軽率さについては、デカルトはすでに41年12月中旬の書簡で叱責しているが⁽¹¹⁾、本書簡でもその論旨は繰り返される。いわゆる「心身問題」に関する重要な文献と言えよう。また、「実在的形相」こそデカルト的機械論が旧来の自然学と最も鋭く対峙するところであるのは言うまでもない。

さて、上記のような状況の下で書かれた本書簡はきわめて複雑な構成をなしている。まず第1に、レギウス宛のいわば地の文の中に、レギウスが書くべき答弁文書の草稿が入れ子になっているわけであるが、さらにその草稿部分の中にヴォエティウスのテーゼからの引用（それもさほど正確なものではない）やデカルトからレギウスへの細かな指示が込められたりしている。それゆえ、文中の一人称代名詞はデカルト自身を指す場合とレギウスに代わって語っている場合が混在することとなるが、本訳では前者を「僕」、後者を「自分」と訳し分けた。

また、第2段落末尾にあるように、言語もラテン語とフランス語が混在している。おおむね第4段落から第6段落までがフランス語、他はラテン語であるが、段落内で他方の言語が用いられている場合もある。本訳ではフランス語主体の段落には先頭にその旨記し、段落内で言語が変わっている箇所は括弧で表示する。

さらには、第24段落から明らかに論旨が変わっている。すなわち、それまで答弁文書を書くことを前提にその草案までしたためながら、一転して一切何も応えぬよう勧告することとなる。それゆえ、明らかに、最初の書簡集の編纂者クレルスリエが2つの異なる書簡を繋ぎあわせたか、あるいは書簡執筆中に入った情報によって見解を変えつつもそれまでの文はそのままに送付したか、そのいずれかであろう⁽¹²⁾。

いずれにせよ、本人が認めているように、本書簡は十分な時間の中で練り上げられたものではない⁽¹³⁾。しかし、そのことは、バイエの言う「デカルトの書簡のうち、彼の温厚さと慎重さのもっとも美しい記念品の一つ」⁽¹⁴⁾であることを妨げるものではないであろう。

第24段落における勧告にもかかわらず、レギウスはデカルトの草案をもとに答弁文書を作成して公表した⁽¹⁵⁾。デカルトの危惧のとおり、それは事態をますます悪化させることとなるのだが、これ以降の展開については別の機会に譲ることとしよう。

なお、訳文の各段落先頭にAM版に従って段落番号を附す⁽¹⁶⁾。続く数字はAT版第3巻のページ数、行数である。また、各種の括弧の意味するところは以下のとおり。

() ……本文中の括弧

《 》 ……本文中のイタリック

『 』 ……本文中のイタリックでヴォエティウスのテーゼ等からの引用

{ } ……段落途中で、言語が変わった箇所

[] ……訳者の補足

【第1段落 (491: 2-493: 17)】 僕は、ここで午後中ずっと、いとも名高き人物アルフォンス氏⁽¹⁷⁾と会い、ユトレヒトの問題について多くのことを、まことに友好的かつ慎重に議論した。僕が彼と完全に同意するのは、君が一定期間公開の議論を控えねばならないということ、そして激しい言葉で誰かを怒らせたりしないよう極めて注意深くなければならないということだ。というのも、僕がもっとも望むのは、君がいかなる新しい意見をも決して提案せず、すべての古いものを言葉の上では (nomine) 保持して、ただ新しい理由のみを述べてくれることだからである。それについては誰も文句を言えないだろうし、君の理由を正しく理解した人びとは、そこからおのずと君が意図しようとしていることを結論するだろう。たとえば、《実体的形相 (Formis Substantialibus)》と《実在的性質 (Qualitatibus Realibus)》について、なぜ君は公然と拒絶する必要があったのか。君は、僕の『気象学』の164ページで⁽¹⁸⁾、僕はそれらを何ら拒絶も否定もしておらず、ただ単に僕の理由を説明するのに必要とされないだけであると、きわめてはっきりとした表現で告げたことを覚えていなかったのか。もし君が同じやり方に従っていたならば、それでも君の聴衆の誰も、それらが何ら役立たないことに気づいて、それらを拒否しないはずはなかっただろうし、そしてとかくするうち、君は君の同僚にこれほど妬みを掻き立てることもなかっただろう。しかし、済んでしまったことはしかたない。今となっては、君は、何であれ君が真と提示したことをできるだけ穏やかに擁護し、もしわづかでも真でないことや、あるいはたださほ

ど適切に言わなかったことを見逃していたならば、何ら執着することなく訂正すべきであって、君は、哲学者において誤謬を率直に認めることほどいっそう称賛に値することは何もないことに思いを巡らせるべきなのである。たとえば、この《人間は偶有性による存在 (ens per accidens) である》⁽¹⁹⁾ ということだが、君が他の誰でも認めること、すなわち人間は実在的に区別される2つのものから成るということしか意図していななかつたことを、僕ならわかる。しかし、《偶有性による存在》という言葉は学校ではこの意味で使われていないのだから、(もしおそらく、僕が先の手紙⁽²⁰⁾で示唆した説明を君が使うことができないならだが。というのも、僕は君の最新の文書で、君はそれから少なからず逸脱し、危険を充分避けようとしていないのを知っているからだ)、君がこの学校の語彙を正しく理解していなかつたことを公然と認めた方が、下手に覆い隠そうとするよりはるかに良い。したがって君は、事柄としては他の人びととまったく同様に考えており、ただ言葉の上でのみ一致しなかつたのだ、と。そして、私的であれ公開の場であれ機会があればいつでも、君は、人間は《真のそれ自体による存在 (ens per se) であり、偶有性による (per accidens) のではない》と、そして精神は身体と実在的かつ実体的に結合しており、君が君の最新の文書で主張したように、それらの位置ないし適性によって (per situm aut dispositionem) ではなく (というのも、それではあまりに反論を招きやすいし、そして僕の判断するところ真ではない)、結合の真の様態によって結合していると信じていると公言しなければならぬのであって、たとえ [この結合の真の様態とは] それがどのようなものであるかは誰も説明していないにしても、誰にでも一般に認められているのだから、したがって君も説明する責を負うことはないのである。だがしかし、君は、僕が『形而上学』⁽²¹⁾ で言ったように言えば良いのであって、すなわち、我々は痛みや他のすべての感覚を、身体から区別される精神の純粋な思惟ではなく、身体と実在的に結合する精神の不明な知覚として知得するのである、と。というのも、もし天使が人間の身体のうちに宿ったとしても我々のようには感覚せず、ただ外的な対象によって引き起こされる運動を知得するだけであり、このようにしてそれは実際の人間から区別されるからである、と。

【第2段落 (493: 18-494: 14)】 君の文書に関してだが、君がそれで何をしようとしているのか僕にはわからないけれども、僕が感じたことを自由かつ率直に言わせてもらうならば、提示された事柄に対しても現今の状況に対しても充分適切であると僕には思われない。というのも、君はそこであまりに難しい多くのことを、正当な原因を防御する理由を充分あきらかにすることなく説明しているものだから、それで、君の精神はそれを書く際におそらく不快感と嫌悪感からして病んでしまったと思われかねないほどだ。僕が率直に言っていることを許してくれると信じている。そして僕にとっては、君が書いた個々の点について何を感じたかを述べることは、何をどのように書くべきかの概略を記すことよりいっそう難しいので、後のやり方をさせてもらう。僕には他の急ぎの仕事がたくさんあるけれども、しかし一日か二日はこのことに費やすつもりだ。つまり、僕は、ヴォエティウスの《補遺》に君が公開文書によって答えた方がよいと考えている。なぜなら、君が完全に沈黙してしまうと、君の敵はおそらく勝ったかのごとくいっそう飛び跳ねてしまうからだ。しかし、君は誰も怒らせないほど慇懃かつ穏やかに答えなければならぬし、

そして同時に、ヴォエティウスに君の議論の方が自分のものより勝っていることを悟らせ、それで繰り返して負けたくなくて君に対し反駁する気持ちを捨てさせ、君に慰撫されるままで我慢させるほどに堅固に答えなければならない。取り急ぎここに、もし僕が君の立場なら、僕はそれをどのようにすべきかを考えて、その答弁の議論を書いておくこととする。そして、言葉が先に浮かぶのに応じて一部はフランス語で、一部はラテン語で書くことにするが、それは、もし僕がラテン語だけで書いて、君が僕の言葉遣いを変えるのを怠ったなら、さほど練り上げられていない文体がひょっとして君のものともみなされないことになっては困るからだ。

【第3段落 (494: 15-18)】 《ジスベルトゥス・ヴォエティウス殿等々⁽²²⁾ の、補遺ないし補遺への註、および神学的哲学的系へのヘンリクス・レギウス等々の答弁》

【第4段落 (494: 19-497: 21)・フランス語】 この後、ヴォエティウス氏に対する一通の慇懃な手紙から始めたいところで、僕ならその中で、彼が《実体的形相》と自然学に属する他の題材に関して公表したまことに博識、まことに秀逸、まことに精妙なテーゼを読んだこと、そして、彼はとりわけ当大学の医学と哲学の教授たちに差し向けているが、自分はそのうちの一人であって、かくも偉大な方がこの題材を扱おうとされたこと、そして〔彼なら〕護ろうとしている意見を証明するのに見出されうるかぎり最良の理由をすべて用いていることに疑いはないのだから、彼の証明の後ではもはや他のものを待つ必要はないであろうことに、この上もなき喜びを覚えている、と述べるであろう。そしてまた〔以下のように述べるであろう。すなわち〕、これらのテーゼで護ろうとされている意見の大部分は自分が教えていたものに真っ向から反しているのだから、彼が序文を差し向けたのはとりわけ自分に対してであり、そしてそのことによって自分が彼に答えるよう促そうとされたわけであって、そのようにして、誠実な競争意識により、それだけいっそうの好奇心で真理を探究するよう自分を導いてくれているように思われ、喜びが倍加しているということ。自分にこのような栄誉を与えてくれたことを、とても光栄に思っていること。かくも強き敵によってなら、たとえ敗れたとしてもそれすら自分の栄誉になるのだから、この攻撃からの恩典を引き受けざるをえないということ。このことで強い親愛の情をこめて彼に感謝しており、彼に負うていて自分でも非常に大きいと認めている幾多の恩義のうちに数え入れているということ。{(ラテン語)ここで、彼が教授職の獲得に際してどれほど自分を支持してくれたか、常に自分を後援し、自分を保護し、自分を援助してくれたか等々を、長々と想起したいところである}⁽²³⁾。最後に、もし自分にも同様に好意的で穏やかな聴衆を期待できたなら、彼のテーゼに別のテーゼでお答えし、この題材について彼のように公開討論をすることも吝かではなかったということ。だが、そうするには彼の方が自分に比べはるかに有利であって、というも総長かつ牧師としての資質のみならず、それ以上に彼の偉大なる敬虔、比類なき理論、他のすべての優れた資質からする彼への敬意と崇拜は、最も無礼な者たちをも制し、彼が取り仕切る場において聴衆たちが何らかの混乱を引き起こすのを防ぎうるからであること。これに対し、自分には同様の敬意はないのだから、敵の誰かが自分の討論に送り込んだ二三の腕白どもで討論を混乱させるに充分であろうということ。そして、自分の最近の討論においてこのなりゆきを悟ったので⁽²⁴⁾、今後も討論を行うならば、自分をあまりに貶め、我らがまことに英明なる行政官殿が光栄にも自

分に本アカデミーにおいて占めるよう求められた場の尊厳を十分に保ちえないと信じているということ。そのことで自分は腹を立ててもいなければ、また起きたことについて恥じるべきとも何ら考えていないということ。なぜなら、反対に、この騒動を引き起こした者たちは我々の答弁を理解しようようになる前にいつも遮っていたのだから、彼らに無礼をはたらかせる機縁となったのは我々の落ち度ではなく、そもそも彼らが我々の討論にやってきた意図は、混乱させて、我々が理由をよく理解させる時間を得ることのないよう妨害することにあつたのだと、まことに容易に指摘できるからであること。このことからして、自分の敵はかくも扇動的でかくも不正な手段を用いることによって、彼らは真理を探究しておらず、また自分の理由を理解することを望んでいないわけだから、彼らの理由が自分のそれより強固であることをも望んでいないことを示してしまったとしか判断されえない。そして、敵の誰かの手管による{(ラテン語)だが、ただか二三の若者の腕白によってだが}この騒動が自分に何をもたらしたのかは知られていないだろうが、最良のものは公表されたとき、最悪のものや最も無礼なものと同様に頻繁にこの運命を蒙ることになるのはよく知られているところである。たとえば、かつて綱渡り芸人のおふざけが非常に人気を博し、[それに対し]そこでテレンティウスの喜劇⁽²⁵⁾をまことに見事に優美に演じた者たちが万雷の打手で小屋から追い出されたように、等々。さて、これらの理由で、自分はテーゼを書くよりもこの答弁を公表するにいたった次第である。加えてまた、一つと同じ主題についての対立する二つの文書を時間をかけて冷静に検討する方が、討論の熱狂の中より真理をいっそうよく見出しうるからであって、討論と言えは双方の理由を考量する十分な時間がないし、我々の理由が最も弱い場合なら、負けていることが露わになるのを恥じてしばしば意識的にその理由を取り除いたりするからである。それゆえ、自分としては彼に好意をもって受け取ってくれるよう懇願するところであって、というのも、彼に気に入ってもらうことしかせず、そして、彼が攻撃する意見を自分が支持している理由を公表することによって、テーゼという形で自分に為された誠意ある叱責に対し十分に応えないほど怠惰ではないことを示しているだけなのだから。そして、このことは一般的には{(ラテン語)学問の世界全体にとって}善であり、そしてとりわけ本大学の善と栄光なのである。そして、自分は彼を敬い、常に{(ラテン語)保護者、この上もなく友好的な支援者等々と}見なしていること。結語。

【第5段落(497: 22-24)・フランス語】この議論の手紙の後、僕ならこう印刷させる。{(ラテン語)この上もなく博識でこの上もなく熟達した医者たちに対するジスベルトゥス・ヴォエティウス殿の短い序文、第一テーゼに続く}。

【第6段落(497: 25-500: 3)・フランス語】{(ラテン語)序文に対する答弁} 第一の学たる彼の神学が彼に与える他の全ての学に対する権力にもかかわらず、また彼の総長たる資質がとりわけ本アカデミーにおいて彼に与える権力にもかかわらず、彼はいかなる弁解もせず哲学と医学の教授たちに対して自然学の題材を扱おうとされたことに対し、自分はここに彼の礼節と作法を大いに称賛するものであること。彼が、『{(ラテン語)哲学の基礎にほとんど馴染んでおらず、明証的で有効な論証に説き伏せられることなく、あらゆる学校の哲学をその語彙を理解する前にやり倒し、その知見を見捨て、上級学部の著者を読んでも成果なく、講義や討論にはあたかも

唾の人間かダイダロスの彫像のごとく強いて聴かされている若者たち』⁽²⁶⁾を咎めておられることについて自分は強く賛同するところであること。{(ラテン語)しかし、彼自身がこの序文でまことに注意深く、かくも安易にそのように振る舞わぬよう}, あたかも実によりきたりではあるが、しかしながら今までのところ知られていなかった過ちであるかのごとく {(ラテン語) 警告しているのだから、ここで彼が考えているのは自分の学生たちについてだけであると訝しんでも不当ではないだろう}。というのも、自分の学生たちが短期間で長足の進歩を為すことを見て嫉妬した者たちが、自分の教え方を非難しようとしていることをすでに知っているからなのだが、彼らの言うには、自分は学生たちに哲学の語彙を説明するのを怠り、それで彼らが書物や他の教授たちを理解できないようにしてしまい、そして彼らにいくつかの細かいことしか教えず、その知識が後でうぬぼれさせることとなって、それで共通の意見をあえて嘲笑することになってしまうのだと。そして、このことについて、ヴォエティウス氏(あるいは英明なる総長等々、できるだけ好意的で格好のよい肩書きを付けておきなさい)は、この中傷に警告しようとして、ここでついでに一言触れたのであるが、それはこの中傷を一掃する機会を自分に与えるためであったと信じている。この点については、自分は、事柄を教えるのにいっそう注意を払っているとはいえ、機会が生じたときには自分の職業のすべての語彙を欠かさず説明していることを示すことによって、容易に果たすであろう。そして、確かに自分は、ただ良識のみをもつ人びとにとつてまことに明証的で理解可能な理由しか用いていないだけに、彼らにそれを理解させるのに無縁な多くの概念を必要とせず、それでも、自分が教える真理を学び、哲学のすべての難しい原理について精神を満足させることになるのだが、それは、他の人びとが同じ諸問題に対しての意見を説明するのに用いるすべての語彙を学んで、それらすべてをもってしても自然な推論を用いる精神をそのように満足させず、ただ懐疑と疑惑のみに満たされてしまう場合よりもより良く学びうるということは喜んで認める。そして、最後に、自分は自分に不要な語彙をも教えずにはおかないこと、そして、彼らにその真なる意味を理解させるのだから、『{(ラテン語) 自分のところの方が、普通の他の人びとにおいてよりいっそう早く学ばれると言うこと}』⁽²⁷⁾。このことは、自分の教えた多くの学生たちの為した経験によって証明できるのであって、彼らは幾月しか勉強していないのに、その後の公開の討論で進歩を立証できたのである、等々。さて、良識ある人びとで、これらすべてにおいて何か非難すべきことがあると敢えていう人が、あるいは大いに称賛されるべきとしない人すら、誰もいないと自分は確信している。{(ラテン語) というのも、もし自分の授業を受けた者たちが他の人びとから反対のことを教えられて、あまりに理性に適合しないものだからそれを嘲る、あるいはそう言ってよければやじり倒すことがしばしば起きたとしても}, だからといってその罪を自分の教え方になすりつけるべきではなく、むしろ他の人びとの教え方を責めるべきであり、自分の授業を中傷して {(ラテン語) 彼らの誣告を彼ら自身で覆い隠そうとする}⁽²⁸⁾より、可能な限り学生たちに自分の授業を受けるよう勧めるべきなのである。

【第7段落 (500: 4-501: 19)】 第1テーゼ、等々。第1テーゼへの答弁 自分はここで英明なる総長殿⁽²⁹⁾の意見、すなわち『《実体的形相》ないし《実在的性質》と呼ばれる《かの無害な存在》をそれらが古代から占めていた位置から無分別に追放されるべきではない』⁽³⁰⁾ということに

完全に同意する。そして実際、我々はそれらをこれまで絶対的に拒絶したことはないのであり、ただ自然的なものの原因を説明するのに我々自身はそれらを要しないと公言しているだけであって⁽³¹⁾、そして我々の理由がこのような不確かで不明瞭な想定にいかなる仕方においても依存していないことをとりわけの根拠として推奨されるべきであると考えているのである。このような事柄で、それらが用いられるのを自分は欲しくないと言うことは、自分はそれらを認めないと言うこととほとんど同じであって、というも、実際他の人びとが認めている所以と言えば、自然的結果の原因を説明するのにそれらが必要だと考えられたこと以外にはないからなのだが、そうすると、我々はそれらを完全に拒絶すると告白することはいずれ問題ではなくなるであろう。このことについて、英明なる総長は我々の咎とは見なしておられないと期待するところであって、というも、我々は長い間『学校の哲学、とりわけ論理学と形而上学と自然学を、きわめて綿密にとはいかぬまでもほどほどに習得しながら、《この哀れな存在》』⁽³²⁾には、弟子たちの精神を⁽³³⁾曇らせ、彼らを、英明なる総長がかくも推奨する『かの知ある無知 (doctæ illius ignorantiae)』⁽³⁴⁾にかわって、ある種の傲慢な⁽³⁵⁾別の無知に陥らせることになる以外には、いかなる役割をも見出していないからである。だが、我々がさほど寛大ではないと見られぬよう、英明なる総長が『哲学の研究を傲慢に蔑んで避けて、さらに無学で粗野で傲慢な無知に陥った若者たち』⁽³⁶⁾を呼び戻したいと願っておられることをも自分は賞賛するところであって、彼がここで自分の学生たちについて嘆いて案じているのは、少し前に言った、自分の哲学を学んだ後に普通の哲学を侮る点についてであることに自分は何の疑念も抱いていない。というも、かくも信心深く、誹謗しようとするいかなる執着からも無縁で、自分に対し個人的にこのうえもなく友好的な方が、自分の教えるところの各々が真で明白であり、ひとたび学んだ者は他のものを造作なく無視することとなる哲学の認識について、『粗野で無学で傲慢な無知』というかくも不適切な言葉を用いようとして、そして偽と思われるかかる意見の無視はより真なる哲学の認識に由来するにもかかわらず、それを『哲学の研究を傲慢に蔑んで避ける』と呼んでおられると判断することは正当ではないと考えるからである。それでは、あたかも哲学の研究という言葉で、いかなる確実な真理も含まない、さらには真理そのものの研究でさえないその論争の研究しか解されるべきではないことになってしまうからである⁽³⁷⁾。

【第8段落 (501: 20-27)】 第2テーゼ、等々。第2テーゼへの答弁 ここでは、少し前に英明なる総長自身がまことに適切にも『偏見と懐疑』と呼ばれた12の論点が提起されている⁽³⁸⁾。というも、理性よりも偏見によって動かされる人びとにとっては何ら肯定すべきではなく、ただ懐疑すべき故を与えうるだけであるが、理性の力によって吟味する人びとによっては容易に解決されるからである。

【第9段落 (501: 28-502: 31)】 彼は『第1項において、実体的形相を否定する意見は聖なる書と一致しうるか』⁽³⁹⁾を尋ねておられる。この点については、予言者や使者、そして聖霊を口授して聖なる書を編纂した他の人びとは、かかる《哲学的存在》で学校の外ではまったく知られていないものを決して認識していなかったということさえ知っているなら、誰も疑いえないところである。というも、言葉に曖昧さを残さぬためにここで注意されるべきことは、我々が実体的形

相を否定するとき、この名称によって、質料と結びつき、質料とともに純粹に物的なある全体を構成しているなんらかの実体と解されているのであって、そして質料は単なる《潜勢(Potentia)》であるのに対しそれは《現勢(Actus)》であると言われているのだから、質料に劣らず、あるいは質料以上に真なる実体、あるいはそれ自体によって存続するものである、ということだからである。ところで、純粹に物的なものの中にありながら質料とは区別されるという、このような実体ないし実体的形相など、聖なる書のどこにおいてもまったく言及されていないと我々は考えているのである。そして、とりわけ、英明なる総長がここで引用されている聖書の箇所が論ずるに働かないことを認めていただくには、その全てを伝えれば充分であると思う。すなわち、『創世記』第1章第11節にはこのようにある。『神は言われた。「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ(juxta genus suum)実をつける果樹を、地に芽生えさせよ』。そして第21節は『神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに(in species suas)、また、翼ある鳥をそれぞれに(secundum genus suum)創造された。等々』⁽⁴⁰⁾。——{(フランス語) 僕としては君に他のすべての文を調べてほしいところであって⁽⁴¹⁾、なぜなら全てを見てみたが、僕はこの点に関わるものを何ら見出さなかったからである}。——というのも、[ここでの]“genus”や“species”が実体的差異を示すと言われることはありえないからであって、なぜなら、たとえば円や正方形に対して形は類であるが、しかしそれが実体的形相等々を持つとは誰も思っていないように、偶有性や様態としての類と種があるからである。

【第10段落(503: 1-5)】 2. 彼は、『我々が純粹に物質的なものにおいて実体的形相を否定するならば、それが何らかの仕方人間に与えられていることも疑うことになろうし、また世界の普遍的靈魂やそれに似たものを想像する人びとの誤謬を、形相の擁護者ほどにはうまく確実に制しないのではないか』⁽⁴²⁾と危惧しておられる。

【第11段落(503: 6-17)】 この《第2項》に付け加えるのは、反対に、実体的形相を肯定する意見から、人間の魂は物的で死すべきものであると言う人びとの意見に陥るのはまことに容易である、ということである。それ[人間の魂]だけが実体的形相であり、これに対し他のものは部分の配置と運動からなることが認められるならば、他のものに対するこの上もなきこの特権は、それがその本性からして異なっていること、そして本性における相違はその非物質性と不死性を論証する道をまことに容易にしつらえることを示しており、最近出版された『第一哲学の省察』で見られるとおりである⁽⁴³⁾。したがって、この点について、これほど神学に好都合の意見は何ら考えられえないのである。

【第12段落(503: 18-504: 2)】 《第5項に対して》。実体的形相を措定する人びとが、もしこれら自体がその能動の直接の原理であると言うならば、たしかに不合理である⁽⁴⁴⁾。しかしながら、かかる形相を能動的な性質から区別しない人びとについては、不合理ではありえない。実際、我々は能動的な性質を否定しておらず、ただ、それに《様態(Modalem)》より大なる何らかの《実在性(Entitatem)》が帰されるべきことを否定しているのであって、というのも、その[様態以上の実在性が帰される]ことは実体のごとく理解されているのでなければありえないからである。また我々は《傾向性(habitus)》⁽⁴⁵⁾を否定するものではないが、しかしそれは2種類あると理解

しているのである。すなわち一方は純粹に物質的であり、それはただ部分の構成ないし他の配置にのみ依存するものであるが、他方は神学者たちの言う信仰、恩寵その他の傾向性ように、非物質的ないし靈的であり、それらは物質に依存せず、精神に内在する靈的な様態であって、運動や形が物体に内在する物体的様態であるのと同様である。

【第13段落(504: 3-14)】《第8項に対して》⁽⁴⁶⁾。どのように自動人形も自然の仕事であるのか、そしてそれを制作する人間は受動に能動を付加しているにすぎないのであって、それはたとえば小麦を育て、あるいはラバの生育に努める際に為していることと同様であることを説明したいところだ。それは、いかなる本質的な差異をももたらさず、ただ自然の導きによって引き起こされているだけであり、だが、たしかに、君が言うように⁽⁴⁷⁾、為されていることの規模の大小は異なるのであって、というも、時計における歯車の少なさ、どれほど卑しい小動物にも見られる無数の骨、神経、血管、動脈等々とは比較すべくもないからである。——ところで、彼が聖書から引用している箇所は、中傷であることが明らかになるように、ここで再びすべて取り上げられるべきであろう⁽⁴⁸⁾。というも、何ら論ずるに値しないのだから。

【第14段落(504: 15-18)】《第10項に対して》⁽⁴⁹⁾。このような議論からすれば、幾何学と機械学の全体が拒絶されるべきこととなろう。このことがいかに滑稽で理性からかけ離れているか、理解しないひとは誰もいない。僕はこれを笑わずには読み通せなかったが、[そのように書くことを] 勧めはしない。

【第15段落(504: 19-27)】《第11項に対して》⁽⁵⁰⁾。我々は、大地がその位置、場所、形に関して動かされていると言っているのではなく、ただ運動できる状態にあると言っているのである。さらに、一つのものがある点では動かされ、他の点では運動できる状態にあるということは循環ではない。また、ある物体が第二の物体を動かし、第二の物体が第三の物体を動かし、そしてこの第三の物体が、もし第一の物体がその前に動きを止めていたならば再び第一の物体を動かすということも、悪循環ではない。それは、ある人間が第二の人間にお金に渡し、それをこの第二の人間が第三の人間に渡し、そしてそれをさらに第三の人間が最初の人に与えるとしても循環ではないということと同様である。

【第16段落(504: 28-505: 2)】《第12項に対して》⁽⁵¹⁾。これらの原理によっては何も説明されないと言う者は、我々の『気象学』を読み、アリストテレスの『気象論』と、同様に『屈折光学』を同じ題材を扱った他の人の書物と比較してみればよい。そうすれば、自然に背いた⁽⁵²⁾ 意見のすべてには恥辱が残ることを認識するであろう。

【第17段落(505: 3-6)】《第3テーゼに対して》⁽⁵³⁾ 実体的形相を証明するすべての理由は、時計の形相にも適用されるのだが、しかしそれについては誰も実体的とは言わない。

【第18段落(505: 7-506: 2)】《第4テーゼに対して》『実体的形相に反対する理由』ないし自然学的論証は、『真理に貪欲な知性を完全に強いる』⁽⁵⁴⁾ ものと我々の思うところであるが、第一には、以下のように形而上学的ないし神学的にア・プリオリなものである。すなわち、何らかの実体が、神によって新たに創造されることなく、新たに存在するということは全くの矛盾であること。さて、我々は実体的と呼ばれるこれらの形相のうちの多くが毎日新たに存在し始めるのを

見ているわけであるが、にもかかわらずそれらを実体的と考える人びとは、それらを神によって創造されたとは考えていない。したがって、彼らが考えていることは誤りなのである。このことは、人間の真の実体的形相である魂の例によって確証される。というのも、[魂が] 神によって直接に創造されたと考えられるのは、それが実体であるからという以外にいかなる根拠もないからである。したがって、他のものは同様に創造されたのではなく、ただ質料の潜勢から引き出されただけと考えられているのだから、それらは実体でもあると考えられるべきではない。そして、このことからして、実体的形相を否定する人びとではなく、むしろ肯定する人びとの方が『堅固な推論によって結局は獣や無神論者になるよう駆りたてられる』⁽⁵⁵⁾ ことは明らかである。僕としては、君がこのような形相の起源から得られた議論を投げつけたり、テルシーテース⁽⁵⁶⁾ に訴えたりすることは、それが論点と思われるから、望むところではない。そうではなく、僕なら、他の人びとがこの問題について述べたことは、我々は彼らに従っていないのだから、我々には関わないということだけを主張するだろう。

【第19段落 (506: 2-20)・AT版段落分けなし】 もう一つの論証は、実体的形相の目的ないし用法から採られたものである。というのも、それらが哲学者たちによって導入された理由は、それらによって、自然的なものに固有の活動を説明し得るようにすることしかなく、前のテーゼに言われているように、これらの形相こそその「固有の活動の」原理であり根源である、というわけだからである。しかし、これらの実体的形相によってはいかなる自然の活動をもまったく説明されないのであって、なぜなら、それらの支持者が、それらは隠れて (occultas) いて彼らにも理解されないと告白しているからである。それでは、何かの活動が実体的形相に基づくと言うことは、それらは自らに知られていないものに基づくと言っているのに等しく、何も説明していない。したがって、このような形相は、自然の活動の原因を説明するために決して導入されるべきではないのである。さて、反対に、我々が説明するか否かの必然的形相によって、自然の活動は明証的かつ数学的に説明されるのであって、そのことは僕の『気象学』で普通の塩の形態について見られるとおりである⁽⁵⁷⁾。これに君が《心臓の運動について》述べたことを付け加えることができる⁽⁵⁸⁾。

【第20段落 (506: 21-507: 15)】 《第5テーゼに対して》彼がかくも頻繁に口に出す『知ある無知』⁽⁵⁹⁾ については、説明に備える。たしかに、人間の知識はきわめて限られており、その知るところのすべても、知らないことに比べればほとんど無でしかないのだから、真に知らないことを自ら知らないと率直に認めることは、知あることの徴なのである。そして、この点に本来知ある無知は存するのであって、なぜなら明らかに真に知ある者に特有のことだからである。ところで、普通知識を生業としながら本当のところは博識ではない他の者たちといえ、学識のある者なら誰でも知らないはずのないことを、博識な人物が知らないと認めても不名誉ではないことから識別できずに、すべてを等しく知っていると言ってしまうのである。それで、すべてのものの理由を容易に説明するために (もっとも、不明瞭なものをいっそう不明瞭なもので説明された場合でも、あるものの理由が説明されたことになるのであれば、だが)、彼らは実体的形相と実在的性質を捻り出したのである。この点において、彼らの無知は決して知あるものではなく、ただ傲

慢で衒学的なものと言われなければならない。というのも、彼らがある性質の本性を知らないというただそれだけのことから、それは隠されていると、すなわち、あたかも彼らの認識が全人類の認識の尺度であるかのごとく全人類に不可知であると結論している点に、明らかな傲慢さがあるからである。

【第21段落 (507: 16-25)】《第6テーゼに対して》⁽⁶⁰⁾ 僕について言及している箇所、かの人間が何を計算しているのか、僕にはわからない。僕が『方法序説』で神が在ることを充分明証的に証明しなかったと彼は言っているが、そのこと自体も僕はそこで公言したのだ。ところで、この目論見からして、『我思う、故に我在り』というこの言葉から、彼はいったい何を引き出すことができるだろうか。そして、彼はここで、メルセンヌ神父の論考と彼のものを引用し、僕に対置させているのであるが、彼のものは今のところ準備中であるし、メルセンヌは僕の『第一哲学の省察』の出版を取りはからった以外にはまったく何もしていないのだから、なんと酷い引用であろうか！

【第22段落 (507: 26-509: 6)】《第7テーゼに対して》⁽⁶¹⁾ 『しかしながら、これ自体、本当のことを言えば……』⁽⁶²⁾ という言葉に代えて、僕ならこう主張したい。——しかしながら、これ自体について、我々はタウレルスやゴルレウスの意見⁽⁶³⁾ に似たものを、また事柄においてあらゆる哲学者たちの普通の正統的な意見と一致しないものを何ら許容していない、と。というのも、我々は人間が身体と魂から構成されると主張するのであるが、それは一方が他方に単に居合わせること、あるいは近づくことによってではなく、真なる実体的結合によってであるからである。(『このためには、確かに身体の側に位置と部分の適切性が自然的に要求されるのだが、しかしながら、それは位置や形や他の純粋に物的な様態とは異なっているのであって、というのも、ただ身体だけではなく、非物質的である魂にも関わるからである』⁽⁶⁴⁾)。ところで語り方 (*modus loquendi*) については、おそらくさほど普通のものではないかもしれないが、しかしながら、我々が意味しようとしていることについては、十分に適切であると考えている。というのも、我々が人間は《偶有性による存在》であると言うのは、その部分、すなわち魂と身体との関係においてでしかないからである。すなわち、我々の意味するところは、これらの部分からすれば、各々が他方と結合されていることはある仕方 (quodammodo) 偶有的であるということであって、というのも、それらは別々に存続しうるものであり、そしてその基体を損なうことなく、あったりあらなかったりするものは偶有性と呼ばれるからなのである。しかし、もし人間がその全体として考察されるならば、我々はもちろん、それは《それ自体による》存在であって、偶有性による存在ではないと言っているのである。というのも、人間の身体と魂を互いに結びつける結合は、それのない人間は人間ではないのだから、人間にとっては偶有的ではなく本質的だからである。しかし、魂が身体から実的に区別されないと考えて誤る人の方が、それらの区別を認めてそれらの実体的結合を否定して誤る人より多いのだし、それに、魂が死すべきものとする者たちを論破するためには、人間における部分のこの区別を教えることの方が、それらの結合を教えるよりいっそう重要なことから、自分としては、この区別を示すために人間は《偶有性による存在》であると言う方が、部分の結合を考慮して《それ自体による》存在であると言うより、いっそう神

学者たちに喜んでいただけるものと願っていたのである。それで、タウレルスやゴルレウスの意見に対し詳しく反駁されていることに答えるのは自分の役目ではないのであり、ただ他人の誤りをかくも不当にかくも厳しく自分に対し捏造されていることに不平を訴えるしかないのである。

【第23段落 (509: 7-27)】 残り [のテーゼ] についてだが、ここまででも思っていたより冗長になってしまったし、そして、君がこの僕の書いたものを使うかどうかも確信がもてないから、もうこれ以上は書かないことにする⁽⁶⁵⁾。だが、君が使いたいと思うならできるだけ早く知らせたいし、[その場合は] 残りを直ちに最後まで書き上げる。また、僕がどの言語を使って欲しいのかも書いておいてくれ。僕が『等々』としておいた箇所は、君の手で補うべきことが欠けているという意味だ。だが、もしよければ、我々がアッキーレスでありネストールである V. L. 殿⁽⁶⁶⁾ にすべてを伝え、彼の忠告でない限り絶対何も受け入れないように。あるいは、もし彼に知られたくないことがあるなら、まことに慎重で我々にもっとも友好的な人物、エミリウス殿⁽⁶⁷⁾ の忠告に従うように。彼らは知力において優り、それに現地にいるのだし、その場におらず推測するしかない僕よりもすべてについていっそう容易に判断できるのだから、彼らを僕以上に信じるように。君がヴォエティウスについて語る際、敬意をあらわしてもあらわしすぎることはないと思うし、また、この件において、君の側に益が生じるのでない限り、皮肉の疑いをもたれぬように用心してくれるよう望む。それは、あとでもし彼の方が我々にやり方を変えさせることになった場合、我々はそれだけいっそう正当に変えることができ、彼の方といえばそれだけ滑稽に終わるようにするためなのだ。また、君の答弁はできるだけ早く、もし可能であれば休暇の終わりの前に刊行されることが望ましい⁽⁶⁸⁾。

【第24段落 (509: 28-510: 21)】 君はもしヴォエティウスに答弁したら教授職が危くなると書いていて、そのことに僕は非常に驚いた⁽⁶⁹⁾。というのも、彼が君たちの都市を牛耳っていることを僕は知らなかったし、もっと自由であると思っていたのだ。君たちの都市がかくも卑しいにせ学者でかくも哀れな暴君に服して耐えていることに、僕は同情を禁じえない。君はそこで生きているのだから、自重し、君の上司たちがよしとすると思われることしかしないよう勧める。したがって、君によってだけではなく他の誰かによってもヴォエティウスにけっして答弁せぬよう勧告するところであって、というのもそのこと自体が少なからず衝突を引き起こすからである。しかし、君の文書をすべてのテーゼと突きあわせてみて僕に浮かんだ [ことを綴った] 即席の小さなメモ⁽⁷⁰⁾ を送ることにするが、君はそれを好きなように使ってい。だが、我々の哲学を望まない人たちに押しついたり、あるいは真剣に求めている人たち以外に伝えることさえ、我々の哲学に弊害となるのだ。君がかつて、我々の哲学のおかげで教授職を得ることができたと感謝の念を述べてくれたことを僕は覚えているが⁽⁷¹⁾、だとすれば君の上司たちがそれに不興をかちはしなかったと思っている。さて、もし状況が変わって、君が真理と思うことよりもヴォエティウスに気に入られることを教える方が望ましいと彼らが考えているならば、彼らのやり方に従い、この件で彼らを不快にするよりもむしろイソップの寓話でも教えている方がましだと僕は思っている。

【第25段落 (510: 22-29)】 君が手紙の終わりで天界の小球について書いていることを、僕は理解できない。というのも、それらはもっとも微細な物質によって動かされているのではなく、世の始まりからそれらに設定された運動をもって、それ自体によって動くと考えているからである。また、より大きなものはより小さいものよりいっそう激しく動かされるのではなく、まったく反対だと思っている。実際、僕は『気象学』で、より大きなものは、いっそう激しく動かされるとそれだけいっそう熱を発するが、だからといっていっそう容易に動かされるわけではないと言ったのだ⁽⁷²⁾。では、また。

註

- (1) アダン・タヌリ版全集 (“Œuvres de Descartes”, publiées par Ch. Adam & P. Tannery. 12 tomes. Paris. 1897-1913, 1996, 以下AT版と略す)ではvol. 3, pp. 491-510, アダン・ミロー版書簡集 (“Descartes. Correspondance”, publiée par Ch. Adam et G. Milhaud, 8 tomes, Paris. 1936-1963, 以下AM版)ではvol. 5, pp. 111-138にある。なお、フランス語の全訳はAM版の他に、G. Rodis-Lewisによる“Lettres à Regius et remarques sur l’explication de l’esprit humain”, Paris, 1959 (以下RD版)がある。また、F. Alquiéによる“Œuvres philosophiques de Descartes”, 3 tomes, Paris. 1973のvol. 2に抄訳があるが、註は独自のものといえ、訳文は大部分RD版のものである。英訳はJ. Cottingham, R. Stoothoff, D. Murdoch and A. Kenny ed, “The Philosophical Writings of Descartes”, vol. 3, Cambridge, 1991のvol. 3に抄訳があるのみである。邦訳はないが、井上庄七『近代哲学史論集』, 1989所収の「デカルトとレギウス」(pp. 133-163)で本書簡についても概説されている。
- (2) 1647年の『哲学原理』序文 (AT-9-2: 19: 12-26)。デカルトからの引用は特記なき限りすべてAT版から。ATの後に巻数, 頁数, (必要に応じて) 行数を順に: で結んで表示する。ただし本書簡を含む第3巻については巻数を省略する。なお, 1647年3月デカルトからエリザベト宛書簡 (AT-4: 625: 16-627: 11) 参照。
- (3) AT-8-2: 341: 1-369: 25. なおレギウスの掲示文書は1647年末, デカルトの覚書は1648年である。
- (4) A. Baillet, “La vie de Monsieur Descartes”, 2 toms, Paris, 1691 (Genève, 1970)のvol. 2, pp. 7-8 (以下, Baillet-2: 7-8のように巻数, 頁数を: で結んで表示する)。バイエのこの文はAT-3: 305-306にも収録されている。このときのことが本書簡第24段落にも触れられている。なお, この書にはバイエ自身による要約本 (1692)があるが, その要約本の邦訳が, 井沢義雄・井上庄七訳, バイエ『デカルト伝』(1979)である。
- (5) 1643年のヴォエティウス宛書簡の一部 (AT-8-2: 163: 10-12)。上記註(2)の『哲学原理』序文でデカルト自ら引用しているのはこの箇所と思われる。
- (6) Baillet-2: 2.
- (7) AT: 462/Baillet-2: 139-140. 『ディネ師宛書簡』(AT-7: 585: 4-16)も参照。紛糾の経緯についての大学の公式文書の一部は, AT: 462-464/489-490にある。バイエもこの文書をもとに書いている。なお, 「この国ではすでにひろく一般に, レギウス氏はデカルト氏と異なる意見をもってはいないと信じられていた」(Baillet-2: 141)のであり, デカルトはこの春のテーゼについても吟味した (Ibid./AT: 367-368)。
- (8) Baillet-2: 147-148. ヴォエティウスのテーゼはAT: 511-520にある。本書簡は主にこれに答えているわけであり, 本訳では必要に応じて註で紹介する。
- (9) Baillet-2: 148-149/AT: 490-491.
- (10) ヴォエティウスの系は, 前註(7)の公式文書(ラテン語)がAT: 487-488に, フランス語でBaillet-2: 146にある。
- (11) AT: 460: 2-461: 14.

【翻訳】 1642年1月、デカルトからレギウスに宛てられた書簡

- (12) AT版は前者の説を採り、第24段落以降の後の手紙を「クレスリエが先のものとなぎ合わせた」としている(AT: 519-520)。しかし、その場合、同段落にある「即席の小さなメモ」とは第23段落までに含まれる答弁の草稿ではなく、失われたものとするしかなくなってしまう。それゆえ、AM版(p. 137, 註1)、RD版(p. 100, 註1)は後者の説を提起している。前半の長い書簡の送付が遅れるうちに、レギウスからの新しい手紙が到着し、見解を変えつつも後半を付加するだけでそのまま差し出したというわけである。決定的な証拠はないが、後者の説の方がより蓋然的と思われる。
- (13) 本書簡第2段落末尾、および第24段落参照。
- (14) Baillet-2: 152.
- (15) レギウスの答弁は1642年2月16日に刊行されたが、ただちに大学当局によって禁止された。ユトレヒト大学図書館にあり、AM版第5巻、pp. 138-140に本書簡との比較がある。40ページのうち16ページはデカルトの草稿をほぼ借用したものである。本訳では必要に応じ註で紹介する。
- (16) 一行の標題は次段落に含めて数える。AT版も、AM版の第18段落と第19段落の間に段落分けがない点以外は同じである。
- (17) ユトレヒト事件で積極的な役割を果たすことになるアルフォンス・ド・ポロ(1602-68)か。1642年1月31日ホイヘンス宛書簡(AT: 523: 21-524: 2)参照。
- (18) 第1講末尾(AT-6: 239: 5-12)。「哲学者たちとことをかまえぬために、彼らが物体の中にさらにあると想像していて私が述べなかったもの、たとえば実体的形相や実在的性質等々を、私は何ら否定しようと思っておらず……」とある。
- (19) その結合が純粋に偶然であるものことで、必然的結合を有する《それ自体による存在》と対置される。それゆえ、人間が《偶有性による存在》であると主張することは、心身結合が偶然的であると解されてしまうこととなる。
- (20) 1641年12月中旬レギウス宛書簡(AT: 460: 2-461: 14)。
- (21) 『省察』第6省察(AT-7: 81: 1-14)。ただし天使については述べられていない。
- (22) 「等々(etc.)」については本書簡第23段落参照。
- (23) レギウスは答弁文書において、この「一通の懇懃な手紙」をここまで忠実に用い、ついでテレンティウスの喜劇の箇所までを省略し、その後本段落終了までを借用している。
- (24) 1641年12月8日、レギウスのテーゼの討論会は、ヴォエティウス派の学生たちの引き起こした騒動によって妨害された。前註(7)参照。
- (25) ローマの喜劇作家(186-159B.C.?)。
- (26) ヴォエティウスのテーゼ、序文からの引用(AT: 512: 7-13)。
- (27) 同(AT-3: 511: 42)。
- (28) 以上、ヴォエティウスのテーゼの序文からの引用と思われるが、AT版にあるかぎりは見あたらない。
- (29) AM版は“Domini Rectoris Magnifici”であり、このように訳したが、AT版、RD版は“Domini Rectoris Magistri”としている。
- (30) ヴォエティウスの第1テーゼからの引用(AT-3: 512: 25-26)。
- (31) レギウスは欄外に「デカルトの『気象学』164参照」と付加している。前註(18)参照。
- (32) ヴォエティウスの第1テーゼからの引用(AT: 512: 25-27)。
- (33) AM版によれば、レギウスは「おそらく」と付加している。
- (34) ヴォエティウスのテーゼ、序文等からの引用(AT: 512: 6)。彼は、実体的形相ないし実在的性質そのものが知られざるものにすぎないというデカルト派からの攻撃に対し、それを「知る無知」として防御せんとしているわけである。本書簡第19段落参照。

- (35) AM版によれば、レギウスは「ないし自惚れた、党派的な」と付加している。
- (36) ヴォエティウスの第1テーゼからの引用 (AT: 512: 30-31)。
- (37) レギウスは第1テーゼに対する以上の答弁を採用し、さらに2ページ分を付加している。
- (38) 『偏見と懐疑』はヴォエティウスの第1テーゼからの引用 (AT: 512: 34)。第2テーゼは12項目にわかれているが、デカルトは7項目 (1, 2, 5, 8, 10, 11, 12) しか答えていない。レギウスは自力で他の5項目についても答えている。
- (39) ヴォエティウスの第1テーゼからの引用 (AT: 512: 41-42)。
- (40) 聖書からの引用の訳は新共同訳より。
- (41) ヴォエティウスが第2テーゼ第1項で挙げている聖書の箇所は『創世記』第1章第11, 21, 22, 24, 25節と、『箴言』第30章第24節から28節 (AT: 512: 44-513: 1)。レギウスは答弁において、ここでのデカルトの言に従ってすべての文を挙げる。
- (42) ヴォエティウスの第2テーゼ第2項 (AT: 513: 3-11) の趣旨。文はかなり相違する。デカルトの言う「世界の普遍的靈魂やそれに似たものを想像する人びと」として、ヴォエティウスはガレノス、アヴェロエス、プラトンの名を挙げて論じている。
- (43) 周知のように『省察』初版の題名には「魂の不死性を論証する」という文言が含まれていた。第2版以降は「魂の身体からの区別を論証する」に改められたが、後者が前者への「道をしつらえる」ものと解されていることに変わりはない。『省察』概要 (AT-7: 13: 25-14: 17) 等参照。
- (44) ヴォエティウスの第2テーゼ第5項は、実在的性質を否定すると、「その媒介において実体を能動に向かわせるいかなる実在的性質もないのだから、被造実体はその能動の直接の原理となる」という不合理に帰着する (AT: 513: 14-17) としている。
- (45) ヴォエティウスは、「運動、静止、量、位置、形」しか様態として認めないなら、伝統的な道徳と神学が徳の基礎に置く獲得された《傾向性》ないし安定した配置を無神論者に対抗して維持することができないと反駁する (AT-3: 513: 19-25)。
- (46) ヴォエティウスは、第2テーゼ第8項において、技術から生じた自動人形と、創造ないし生成によって生じ「固有で内在的な能力の領域に属する」神と自然の作品との間の一義性を拒否する (AT: 513: 26-30)。
- (47) レギウスの答弁草案と思われる。
- (48) ヴォエティウスは参照箇所として『詩編』第104章第29節、第7章第14・15節、『民数記』第16章第22節、第27章第16節、『ヘブライ人への手紙』第11章第9・10節、『ハバクク書』第2章第19節を列挙している (AT: 513: 30-32)。レギウスはここでもデカルトの助言に従い、すべての箇所のテキストを挙げている。
- (49) ヴォエティウスの第2テーゼ第10項には「[実体的] 形相とその能動的な性質に帰属させるのが慣わしである作用と運動を量と形に帰属させるとき、その結果として若干の若者たちは軽率にも以下の魔術的な公理を認め、ついにはキリスト教的な神学と哲学のすべてを拒絶するに至る [かもしれない] と警戒されなければならない。すなわち、《量と形は作用的な何ものかであり、そしてそれはそれ自体によってであれ他のものとの協働によってであれ、あたかも [錬金術の] 変成の能動的原理のごとくある、と」とある (AT: 513: 33-38)。
- (50) ヴォエティウスは、第2テーゼ第11項において、地動説には無限後退ないし循環論証が含まれているとして非難する。「たとえば、地球はどのように動くのか。答は、なぜならその位置、場所、形が動くからである。では、それらはどのように動くのか。原子ないしエーテルの要素等々によってか。……それでは、原子のこの世界はどのように、なぜ動くのか」 (AT: 515: 2-6)。
- (51) ヴォエティウスは、第2テーゼ第12項において、機械論的原理は「自然の神秘における何も説明せず、堅固には論証しない」と非難する (AT: 514: 8-9)。

【翻訳】 1642年1月、デカルトからレギウスに宛てられた書簡

- (52) レギウスは「我々ではなく我々とは異なる意見をもつ人びとの」と付加している。
- (53) ヴォエティウスは、第3テーゼにおいて、実体的形相に賛同する理由を、権威を用いて3つ挙げている (AT: 514: 17-515: 6)。
- (54) ヴォエティウスの第4テーゼからの引用 (AT: 515: 7-9)。「完全に」はデカルトの付加。ヴォエティウスはこのテーゼにおいて、その反対理由を吟味している。
- (55) 同 (AT: 515: 18-19)。ヴォエティウスは、実体的形相を否定する主張によって、軽率な若者たちは「獣や無神論者になるよう駆りたてられる」と言う。
- (56) テルシーテースとは『イーリアス』に出る最も醜くて口汚く復讐心の強い男。アッキーレスをからかって彼に殺された。ヴォエティウスの第4テーゼでは、レギウスをアッキーレスになぞらえて揶揄している (AT: 515: 11)。
- (57) 第3講 (AT-6: 249-264)。
- (58) レギウスはこの助言に従い、答弁文書において心臓の運動について詳しく論じている。
- (59) ヴォエティウスは序文に引き続き、第5テーゼにおいても「知ある無知」について言及している (AT: 517: 4)。前註 (34) 参照。
- (60) ヴォエティウスは、第6テーゼにおいて、レギウスの機械論批判に際しデカルトの名を挙げ、その神の存在証明やコギトの論証の脆弱性を批判している。また、メルセンヌやヴォエティウス自身の近刊についても触れている (AT-3: 517: 38-42)。
- (61) ヴォエティウスは、第7テーゼにおいて、「人間は偶有性による存在である」という主張をめぐる9つの論点を提出している (AT: 517: 43-519: 26)。
- (62) レギウスの答弁草稿の文言と思われる。
- (63) タウレルス (1547-1606) やゴルレウス (1549-1609) は無神論者として断罪された。ヴォエティウスは、レギウスの主張を彼らのものと同様とみなそうとしている。
- (64) レギウスの答弁草稿の文言か。
- (65) レギウスは残りの第8テーゼ、第9テーゼに対し自力で答弁を書いた。
- (66) RD版はユトレヒトの高官でデカルトの友人、ファン・レウとする (p. 98, 註2)。AT版はファン・レウの名を挙げつつも、「おそらくファンデル・ホルク」としている (p. 509, 註1)。
- (67) ルネリ死去に際し追悼文を読み上げた修辞学および歴史学教授。Baillet-2: 20, および1640年5月24日レギウス宛書簡 (AT: 63: 2-64: 4) 参照。
- (68) この休暇は2月1日まで。
- (69) 前註 (12) 参照。
- (70) 同。
- (71) 前註 (4) 参照。
- (72) 第1講 (AT-6: 234: 29-237: 24)。